親子と街がはぐくむ賢い商店街ライフ

Wadatch

“わだっち”

第２号

発行日　2012年6月16日
発行元　わだっち編集部
連絡先　090-3097-8636
machidebut_info@yahoo.co.jp

親子で街デビュープロジェクトの活動ブログはこちらでご覧ください。
http://blog.goo.ne.jp/machidebut

連載スタート　地域コミュニティ新聞「わだっち」への道

第１回 「価格」だけでは満足できない消費者の心

豊かな商店街が欲しい！

「お買い物で重視するのは『価格』。でも安さばかりを追うお買い物に物足りなさを感じている」――。2年前にはじめて行った商店街と親子の出会いイベント「親子で街デビュー@和田商店街」の席上でこんなママの声を聞きました。

いまどきの消費者がお買い物で重視するのは、やはり『価格』。チラシで値段をチェックし、スーパーへまとめ買いに走ります。一箇所で必要なものがそろうスーパーの便利さもいいけれど、実は地域に自慢できるような個性的な商品やお店がほしい。

商店街への期待は、住民としての誇りの裏返し。「この店があるから」と、本当は自分が選んで住む街に自分自身が溶け込んで、街を使いこなす経験を誇りたいのです。

「わだっち」で話しかけるきっかけを！

商店街のお買い物は、若いママにはちょっとハードルが高い。

無言で買い物ができるスーパーやコンビニと違って、店主と話をしないと自分に必要な商品や知識が手に入らない。見知らぬ人とのコミュニケーションが苦手な若い世代にとって、これはちょっとした難関です。

「わだっち」は商店主の魅力を、消費者の皆さんに紹介し、「話しかけるきっかけになれば・・」という気持ちで編集しています。チラシやフリーペーパーの記事にはそういう内容はありません。商店主が「どんな気持ちで店頭に立っているのか」「どんな苦労をしてきたのか」「お客さんと触れ合う楽しみは何か」「店に並べた商品にどれだけこだわっているのか」・・・それがわかれば、きっと話しかけやすくなりませんか？

「わだっち」の記事がきっかけで、会話が弾み、名前を覚えてもらう。店主とお客さんが声を掛けあう。そういうふれあいで、心がポッと温かくなる――そういう商店街を私たちはつくりたいのです。商店も、自分たちの気持ちがお客様に伝わることを望んでいらっしゃいます。

お互いの力を生かしあって

これまでの活動で、「晩御飯のメニューが決まらないときは、お店の人に相談しちゃうのよ」という商店街の達人も登場。商店街だからこそそれぞれの商売に専門性があって、モノの売り買いだけでなく知識のやり取りがあると気づきました。

もちろん商品へのこだわりや、味や質の良さも、出会いが深まる中で実感しています。

まずは私たちが知りえた「和田商店街の魅力」を多くの同世代に「自慢」することからはじめていますよ！

消費生活アドバイザー　西平則子

にしもっちゃん

私がはじめて和田商店街に来たのは２００９年の夏の朝。スタジオで開かれている白石さんのマドレボニータ産後クラスに向かう途中に、店先をお掃除するおかみさんたちが「おはようございます！」とあいさつを交わす姿に感動。自然なふれあいの豊かさ。現代日本で当たり前のようでめったに見られない風景です。

→実は、あいさつ励行運動を推進している街なのですよ！

現在スーパーつかさのある場所が、昔は「黄金座」という映画館だっとか！？隣の酒屋のご主人は、こどもの頃、お隣さんのよしみで裏から入れてもらっていたそうですよ。電柱の標識の「黄金通り」という文字に、当時の名残を感じます。

ゆかりん

→和田商店街で繰り広げられた「ニューシネマパラダイス」な世界！！

新メンバー

のだっち

新中野在住、0歳3歳男児の母です。和田生まれ和田育ち!

くねくねと続く古い道の半ばにある帝釈天、その先が和田商店街。「千と千尋」に登場しそうなレトロな海苔屋さんが店を構える分かれ道。先の見えない曲がり道に次々現れる惣菜屋さん、金魚屋さん、肉屋さん。夕暮れにはときどき、タイムスリップしたかのような錯覚を覚える不思議な街です。

→映画「三丁目の夕日」を彷彿させるレトロな町並み。和田商店街から見える夕日は、「三丁目の夕日」ではないか？？

街歩きで発見！ 和田トリビア

トリビアとは、くだらないこと、瑣末なこと、雑学的な事柄や知識、豆知識を指す。（Wikipediaより）
2002年からフジテレビで放映されたバラエティ番組「トリビアの泉」が記憶に新しい。
和田トリビアは、わだっちメンバーが親子の視点で発見した「心あたたまる、ささいな驚き」を取り上げます。

あまちゃん

いつもは夕方通る和田商店街。ある日15時過ぎに通ったら、どこからともなくお店の人が外に出てくださっていて、車通りの多い道をふらふら歩く小学生の下校を見守って（時に注意して）くださっている店主さんがちらほら。これにはとても感動し、この商店街、なくしたくない！と思った瞬間でした。

→和田小学校の子供たちの下校時間に、通りにでて見守りをしてくれる店主さん。やんちゃな子どもたちを見守ってくれている視点がやさしいんです。

和田1丁目在住、5か月女児の母です！

新メンバー

あきちゃん

妙法寺の参道として栄えてきた場所、それが和田商店街。昔は何十ものお店がこの地に軒を連ねていたとか。沢山の思いがつながって、今の和田商店街の姿があります。今も昔も変わらない、会話と笑顔が絶えない場所。知らずに通り過ぎるのがもったいない、沢山の魅力を秘めた商店街です。

→昭和40年代の最盛期には約120店舗のお店がひしめいた商店街。江戸時代には妙法寺におまいりをする将軍様もお通りになった道なのですよ。

和田商店街には言わずと知れた「商店街ソング」があるらしい。だれが歌っているの？どこで録音してる？歌詞の全貌は？？うーむ、ナゾが深まります。ただひとつ言えるのは、なかなかに本格的だってことです。

さっちい

→商店街ソングは「和田商店会の歌」。歌うはシンガーソングライターの山田尚史（たかふみ）さん。商店街の有線放送で流れる歌詞にほっとします。

アンケートにお答えください

地域新聞「わだっち」について、多くの方に楽しんでいただける紙面づくりのためにアンケートを行っています。

■携帯電話からはQRコードを読み取ってご回答ください。
■PCからは下記アドレスにアクセスしてご回答ください。
http://start.cubequery.jp/ans-0045129b

多くのみなさまの声が編集部員のはげみになります。どうぞご協力をよろしくお願いします。

わだっち編集部が行く！　お店訪問レポート　2

変わらぬ味へのこだわり。

味の店　川上屋

住所　杉並区和田3-11-6
電話　03-3381-0254
営業時間　9時30分～20時
定休日　日曜日

「いらっしゃい。今日は何にしましょう」

食料品店、川上屋では、五十嵐さん夫妻がいつも柔和な笑顔で迎えてくれる。ご主人の実さんが毎朝築地から仕入れてくるピチピチの新鮮な魚をはじめ、手作りのお惣菜や漬け物が所狭しと並ぶ。店の屋上で天日干しにする干物も自慢の一品だ。

黄色い看板にひときわ目立つ赤い字で「味」の川上屋。何よりも味にこだわる。少々値段が高くなっても、素材を吟味し、納得したものしか店には置かない。「商売的には上手でないかもしれないけどね」と、実さん。

「味の川上屋」の看板に偽りなし！

新潟県山古志村で生まれ育った実さんは、同じ新潟出身の先代が開いた川上屋で働くことになり、昭和34年4月6日、SLに乗って上京した。中学を卒業した15歳の春だった。

故郷の村の食料品店はいつ行っても暇そうで、大声で呼ばないと奥から出てきもしなかった。「食料品店の仕事は楽そうだな」――実さんのその予想はすぐに覆された。到着した次の日、まだ夜も明けぬうちに叩き起こされた。

開店は朝の5時半。家庭に冷蔵庫などない時代で、近所の人たちが早朝から朝ごはんのおかずを買いにくる。納豆は納豆屋へ、豆腐は豆腐屋へ仕入れに行って店に戻ると、飛ぶように売れた。朝のお客が一段落したと思ったら昼食用、それが済むと夕食用と、休む間もない。夜も銭湯帰りのお客のために、11時半頃まで店を開けていた。

実さんの実直な働きぶりが認められ、昭和44年、結婚と同時に先代から店を譲り受けた。

方南町から嫁いできた妻の安也子さんも、あまりの忙しさにびっくり。実家は酒屋で、商売の大変さはわかっているつもりだったが、「こんなに忙しいとは思わなかった。一生分どころか、二生分働いたんじゃないかしら」。

実さんは魚と漬け物、安也子さんはお惣菜担当。夫婦円満の秘訣は「相手の領分を侵さないこと」

そんな安也子さん、結婚するまで豆を煮たこともなければ、包丁もろくに握ったことがなかった。お惣菜を任されることになり、料理を一から勉強した。先生は商店街のおかみさんやお客さんたち。「今日の豆は固い」「煮物の味が薄すぎる」と、皆が姑のように口うるさく言ってくれる。その「愛のムチ」で、料理の腕はめきめきと上達した。

今では、きんぴらやひじきの煮物といった定番商品に加え、日替わりで春巻きやロールキャベツなど、バラエティ豊かなお惣菜が10種類以上並ぶ。一番人気は小鯵の南蛮漬け。二度揚げしているので骨まで食べられると評判だ。驚くことに、お惣菜が売れ残ることはほとんどない。「お客さんに育てられたのよ」と、安也子さんはどこまでも謙虚だ。

子どもの誕生をきっかけに、川上屋に新しい風が吹いた。子どもが小さいうちは、実さんがおんぶして店に立った。お風呂に入れるのも実さんの役目。まさに元祖イクメン。
日曜日を定休日にしたのも、和田商店街では川上屋が初めて。姑のような商店街のおかみさんたちには「商人にあるまじき」と散々怒られたが、「子どもといっしょに過ごすため」と、意にも介さず。古い考えにとらわれない店のあり方を、川上屋が示した。

目が回るように忙しかった商売も、時代の移り変わりとともにゆっくりに。最近ではお客さんとの付き合い方も変わった。一人暮らしのお年寄りに商品一つから配達する一方で、若いママさんが店を訪れると、声をかけずに買い物を見守る。「今の若い人はスーパーでしか買い物をしたことないから、声をかけられるとびっくりしてスーッと出ていっちゃうのよ」。

お客さんに寄り添い、家族を守り、少しずつ姿を変えてきた川上屋。変えないのは味へのこだわり。五十嵐さん夫妻は今日も笑顔で店に立つ。

☆半径10メートルの川上屋さんエピソード☆

川上屋さんの奥さんは、手先が器用なんだ。お店の横に飾ってある折り紙がきれいなんだよ。きれいと言えば、花を育てるのも上手。玄関先の鉢植えがすばらしいよ。
（ミートショップ　すがぬまさん談）

開店当時の川上屋さん

深い庇（ひさし）に遮られ、お店の中がなかなかうかがい知れない川上屋さん。気にはなるけど敷居が高くって…という方も多いのでは。
かくいう私もそうでした。勇気を出して一歩足を踏み入れれば、確かな味と五十嵐さん夫妻の優しさに、もっと早く入ってみるんだったと後悔するほど。美味しい魚の食べ方から、子育てのアドバイスまでもらえます。
お惣菜のわたしの一押しは菜の花鰊（にしん）。ごはんのお供にも、お酒のつまみにも最高です！

■取材：ゆかりん　■取材日：3月7日